

レースっていいよね  
第 67 回 「奇妙な体験」 の巻

鈴鹿から京都まで、いつものようにクルマを走らせていた。  
朝の清々しい空気なか、太陽も春の到来を感じさせるほど、心地が良い。

いったい、何回このルートを往復してるだろう？  
なんてコトを考えながら、鈴鹿峠を越え、土山を越える。いつものことだ。  
国道一号を西へ走る。

滋賀県の山中で、それまで軽快に開けていたアクセルの親指が緩んだ。  
理由は分からない。  
ついさっきまで、晴れやかな気分だったのに、突如として悪寒を感じたのである。  
背筋に走る冷や水・・・、とでも言おうか。

すると、山中にも関わらず、麓から人影が現れた。  
「えっ？」 これにはさすがに驚き、思わずフル・ブレーキングで減速。

その人影は、間違いなく、私をめがけて近寄ってくるのである。  
しかも、その表情はまるで、討ち入りの志士のように陰しく、こちらを  
ギロっ と睨み付けている。

「ひええっ・・・？ お・・・おかつびき！？ 」  
「ご用だっ！」 「ご用だっ！」

恐怖に硬直した私は、クルマを完全に停止させてしまった。  
見たことも無いような、数名のおかつびき達は、あっという間に私のクルマを  
取り囲んでしまった。  
脳裏には、映画「ゾンビ」で、逃げ惑う人々がゾンビ達に囲まれる映像がよぎる。

「ひえええっ！ いやああ・・・！！」

あまりの恐怖で、その直後の記憶もそぞろ・・・で、気が付けば、とてつもない  
倦怠感にグッタリしながら、再びクルマを運転して京都に向かっていた。

・・・そういえば、おかつびきの一人が、見覚えのあるモノをしきりに見せてきた。  
きっとあれは重要なメッセージだったに違いない。  
それは、まるでお札のような形状の、細かい文字がびっしりと書き込まれた  
赤い、薄い紙キレだった。それだけはハッキリと憶えている。

朦朧とする意識のなか、「あれは何だったんだろう？ 悪夢？」

京都に無事到着してから、この奇妙な体験を前田に話した。  
ヤツは、まるで信じられない、という表情でこちらを見つめ、ひとこと言った。  
「やりおった・・・」

チキショウ。通算、五回目の撃墜「され」記録がまた更新された。

(15March04)



[GO to TOP PAGE](#)